

## 病院図書館における電子ジャーナルへの移行

及川 はるみ

抄録：聖路加国際病院医学図書館では、2004年以降、雑誌契約形態を冊子体から電子ジャーナルへと移行している。出版社側の電子ジャーナル商品への移行、毎年10%近く上昇する外国雑誌価格、契約タイトル数の確保、病院内インフラの整備、そして利用者からの要望。好むと好まざるとに関わらず、病院図書館において雑誌は電子ジャーナルでの提供へ移行していく。病院図書館における学術雑誌提供の行方を、聖路加国際病院医学図書館の事例を挙げて述べる。

Key words：病院図書館、学術雑誌、電子ジャーナル

### I. はじめに

病院図書館の主な利用者は臨床現場で診療にあたる非常に多忙な医療従事者である。多くの病院図書館は利用の便宜を考慮して、24時間利用可能な環境を提供しているが、それでも図書館内に「所蔵」している資料を利用するには時間も手間もかかるというのが本音だろう。ワンクリックで学術雑誌・学術論文を効率的、実用的に利用できる電子ジャーナル。文献データベースからのlink out機能も整備されてきた今日、多忙な臨床現場では、電子ジャーナルを切望している。

もちろん電子ジャーナルは万能ではない。Archiveの確保、インフラトラブル時のルート確保、快適にアクセスするためのシステムメンテナンス、提供元統廃合に伴う契約条件の流動性。文献への永続的なアクセス保障という点では不安はつきない。

しかし、出版社サイドでは雑誌の提供形態

を冊子体から電子ジャーナルへ移行している。好むと好まざるとに関わらず、病院図書館において冊子体から電子ジャーナルへの積極的転換を避けることはできないと思われる。

本論では、病院図書館における雑誌契約の行方を、聖路加国際病院医学図書館(以下、当館)の事例を紹介しながら論じていく。

### II. 当館における電子ジャーナル導入

#### 1. 契約雑誌タイトル数と利用状況

2003年度以降の当館の雑誌契約タイトル数と利用状況を図1に示す。

2004年以降、雑誌契約の主流を冊子体から電子ジャーナルへ移行してきた。その主な理由は、以下の通りである。

- (1) 限られた予算の有効利用
- (2) 利用者への公平な分配
- (3) 利用者(主に医師)からの要望
- (4) 図書館移転による物理的利便性低下への代替措置

#### 2. 限られた予算の有効利用

外国雑誌の購読価格は毎年約10%上がり、

OIKAWA Harumi

聖路加国際病院 医学図書館

harumioi@luke.or.jp

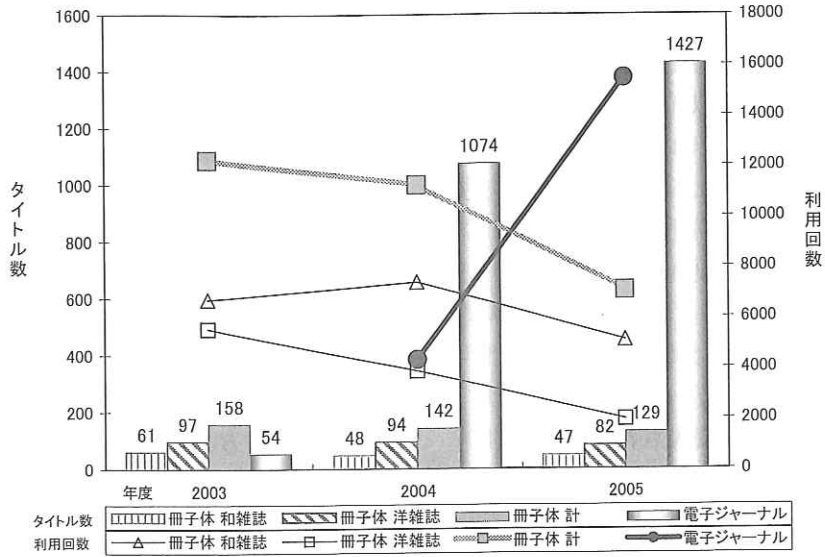


図1. 雑誌契約タイトル数と利用回数の推移 (2003~2005年度)

また為替レート変動の影響も受ける。一方、図書館予算はそれに見合う増額は期待できない。したがって、冊子体契約のみでは、毎年契約タイトル数を減らすしかなく先細りである。

「シリアルズ・クライシス」と呼ばれる外国雑誌の価格高騰は、規模の大小に関わらず、図書館界に大きな打撃を与えた。国立大学図書館協議会は、強力なリーダーシップを持つ館長を核としてコンソーシアムを結成し、出版社サイドとの交渉を経て、妥協できる電子ジャーナル契約条件を引き出し、アクセス可能な雑誌タイトル数を確保した。

### 3. 契約状況

2006年6月現在、当館が導入している商品は以下の通りである。

- ProQuest Medical Library
- Medical Online
- Elsevier Science Direct Hospital Paccage
- Oxford University Press JPLA & JMLA Consortium (Biomedical)
- Lippincott Williams and Wilkins(LWW)

/ Ovid Fixed100 Print Retain

- 電子ジャーナル管理システム:OJMS

原則として個別タイトル契約ではなく、パッケージ商品を契約している。電子ジャーナルパッケージは、契約金額に比して利用可能なタイトル数が圧倒的に多い。また、特定科の偏りがなく利用者へ公平に還元できる商品とも言える。そのほとんどは当館が加盟している日本医学図書館協会(JMLA)コンソーシアムに参加しての契約である。2004年以降、急激に当館の電子ジャーナル数が増えたのは、JMLAの交渉努力により、大幅なディスカウント価格が提示されたことも一因である。JMLA加盟経費や協会事業への協力義務を考慮しても、当院においてこの恩恵は多大なものである。

商品選択のポイントは以下の通りである。

- (1) 当院利用者のニーズにあった雑誌が含まれている
- (2) Inter-Library Loan (ILL) で当館からの依頼が多い雑誌が含まれている
- (3) 費用対効果に優れている

#### 4. 導入経過

##### (1) OJMS(当初契約時名称: IT Station)

パッケージ商品導入以前は、冊子体に無料で付属する電子ジャーナルのみを Excel でリスト化し、提供していた。しかし、この方法ではアクセスログを確認できない。また、ID・Password 管理も煩雑であった。

そこでまず 2003 年に、電子ジャーナル管理システムである IT Station を契約した(現在の商品名: OJMS)。このシステムでは、ID・Password が自動投入されるため、利用者個人に ID・Password を通知する必要がなく、情報セキュリティ上でも便利である。また、各ジャーナルへのアクセスログも取れる。利用回数を契約判断材料として把握したい図書館側としても有用である。

##### (2) ProQuest Medical Library

2004 年当時、JMLA コンソーシアム提示価格で導入可能であった。

##### (3) Medical Online

価格が高く躊躇していたが、ディスカウントの申し出により契約。導入に際して、同商品に含まれる冊子体タイトルは中止した。2005 年の契約開始時は ID/PW 認証タイプ。利用回数が翌年の契約価格に反映されるとの説明であったため、利用者に対して積極的な広報は行わず、希望者のみに個別 ID/PW を発行していた。しかし、登録者が ID/PW 発行限度の 100 名を超過し、新入職員への対応、医中誌 WEB や JMEDPlus からリンクが設定されたことによる利用増加を鑑み、2006 年度よりフリーアクセスプラン病院図書室特別価格 IP 認証タイプへ変更。

##### (4) Elsevier Science Direct Hospital Package

病院向けパッケージが販売され、手の届く価格になった。

##### (5) LWW/Ovid Fixed100 Print Retain

##### (6) Oxford University Press JPLA &

#### JMLA Consortium(Biomedical)

JMLA/JPLA 加盟機関向けコンソーシアム契約により導入。LWW 発行の雑誌は電子ジャーナル利用の要望が院内複数科から寄せられていた。単品で契約するとかえって割高となり、他科への公平性も損なわれる。このパッケージ導入により、費用対効果、公平性の問題は解決できた。しかし、冊子体の継続購読が義務である。

#### 3. 経費捻出方法

所属人数の少ない科に取っては不利な方法であるが、利用回数の少ない雑誌は更新時期に図書委員会に諮り、購読を中止している。当館では毎日司書が利用統計を取ってから資料を配架する。電子ジャーナルのアクセス回数を合算した年間利用回数と購読価格を鑑み、中止タイトルを決める。伝統的に国内学会誌は院内職員からの寄贈のみでまかなっているが、商業誌も継続的に寄贈を受けられる目処が付き次第、購読を中止している。

また、雑誌の製本を見送る、単行書を購入しないなど、雑誌タイトル数の確保を最重要事項として予算を組み直した。

2005 年の図書館移転時には、物理的利便性低下の代替措置として、電子ジャーナルへの移行と予算増額を要求した。

### III. 導入後の評価

#### 1. 商品の評価

ProQuest Medical Library と Medical Online は、アグリケータ系の商品であるため、出版社系の商品よりも画質や収載までのタイムラグなどにおいて劣る感は否めない。また、全てのページが必ずしも網羅されていない、増刊が含まれていないなど、想定外のケースもあった。

## 2. 利用者の反応

冊子体よりも電子ジャーナルを望む利用者の増加を実感している。特に大学附属病院を前職とする新入医師や若手医師は、冊子体を中止してでも電子ジャーナルを、という志向が顕著である。イントラネットに、当館OPACと電子ジャーナルリストを掲載しているが、まず電子ジャーナルリストから検索し、そこに見あたらなければ院内では利用できないと思いこむ利用者が多い。冊子体を所蔵しているので来館すれば利用できる、と説明しても通じない者もいる。また、PDF Fileで文献を入手したいという相談も増えている。

今後、利用者世代が入れ替わるにつれて、ますますこの傾向は強まっていくと思われる。

## 3. 図書館サイドの業務変化

電子ジャーナルのメリットもデメリットも実感している。

製本が不要なので、その点においては担当者の業務量、書架スペースが削減できる。行方不明にならないので、雑誌の行方を心配することはない。

しかし、冊子体登録業務の他に電子ジャーナル管理業務がプラスされた。電子ジャーナルへの移行が進むに伴い、アクセス不能時の契約先への問い合わせや、システムメンテナンス業務の比率が大きくなっている。冊子体と電子ジャーナルの所蔵情報を一元化できていないため、利用可能か否かの照合の手間が増えている。書誌データベースと当館で利用可能な電子ジャーナル、OPAC、未所蔵資料のILL依頼をスムーズに結ぶリンクリゾルの導入と活用がもっかの課題である。

## IV. おわりに

雑誌の価格や契約パターン、出版形態は、事実上出版社の経営戦略に左右される。総合

大学図書館のように、全学一本化して契約できる機関の利用者は多大な恩恵を被る。一方、既存のコンソーシアムへの参加さえ難しいような小規模図書館では、現状では電子ジャーナルの契約は難しい。親の所得格差が教育環境の格差、そして子どもの学力格差へつなぐと話題になっているが、医学系図書館とその利用者-人の生命に関わる医療従事者-においても同様の構図が垣間見える。

設置母体や規模、使命、利用者の情報ニーズなど、何らかの共通項のある病院が共同で交渉にあたるという方法も考えられる。病院の実情に見合ったコア・ジャーナル・パッケージの要請、または雑誌タイトル指定などによる価格設定の要求、冊子体同様ILLへの使用を保証することなど、折に触れて提供者側へ伝えていく必要がある。

医学領域雑誌の発行形態は電子ジャーナルへ移行していく。利用者も電子ジャーナルへの志向を強め、ニーズは高まっていく。病院図書館においても、いかにして冊子体から電子ジャーナルへ契約を移行していくか、どうすれば導入できるか、積極的な情報収集と戦略を練る時期が来ている。

## 参考文献

- 1) 東邦大学医学メディアセンター. 電子ジャーナル 2005 付録:なぜ購読雑誌が減っていくのか(医学メディアセンターブックマーク・シリーズ;14). [引用 2006.6.9]. <http://www.mnc.toho-u.ac.jp/mmc/handout/ej05.pdf>
- 2) 土屋俊、安達淳、高野明彦他. 電子ジャーナルで図書館が変わる(情報学シリーズ;6). 東京:丸善;2003.
- 3) 特集:電子ジャーナルをめぐる. 医学図書館 2003;50(3):217-251.
- 4) 「医学図書館」編集委員会. 「電子ジャー

- ナル」出版社アンケート調査結果報告. 医学図書館 2003 ; 50(3) : 232-251.
- 5) NPO 法人日本医学図書館協会雑誌委員会. JMLA 電子ジャーナル・コンソーシアム・アンケート調査結果報告. 医学図書館 2005 ; 52(3) : 270-280.
- 6) 特集: 電子ジャーナル. 情報の科学と技術 2002 ; 52(2) : 67-99.
- 7) 児玉 潤. 講義(5)雑誌 2. 電子ジャーナル (JMLA 第9回基礎研修会講義テキスト 2002年8月7日~9日:鶴見). [引用 2006.6.9]. [http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/event/kako/kiso-back/9th\\_kiso\\_text/kodama.pdf](http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmla/event/kako/kiso-back/9th_kiso_text/kodama.pdf)
- 8) 時実 象一. 電子ジャーナルの動向と情報源. [引用 2006.6.9]. <http://www.dab.hiho.ne.jp/cirrus/>